

# 精神障がい者の自立を支援する

## NPO 法人 セルフサポートセンター浦河（浦河町）

精神障がい者といえば暗く、寡黙でいつもうつむきかげん、時にあらぬことを口走り、あばれるというのが一般的なイメージだろうか。ところがここ、日高管内浦河町の障がい者の人たちは全員、めっぼう明るく、言動もはきはきしていて接する人たちを驚かす。なぜだろうか。秘密は、一人ひとりが能力に応じて職を持ち、皆で助け合い、おぎない合って地域の活性化やまちづくりに役立ってゆこうという“生きる意義”を自覚しているためと思われる。それを陰に陽に支えているのが「NPO法人セルフサポートセンター浦河」。

そのスタッフの大半も障がい者。背景には、30年以上にも及ぶ障がい者の自立活動の実践と、貴重な経験の積み重ねの努力が秘められている。不穏、不安な社会の現実、不登校やひきこもり、認知症など心身を病む人たちが増える中、このセンターや障がい当事者のあり方が道内外の注目を集めている。

### ■ 自立の基礎 昆布の袋詰め

「セルフサポートセンター浦河」がNPO法人になったのは2007年9月と、まだ日が浅い。しかしその基本となる考え方は、1978年、浦河赤十字病院精神科を退院した精神障がい者3人で発足した「回復者クラブどんぐりの会」と、その考えを次々に実践していった自立企業集団「べてるの家」にさかのぼるので、歴史は30年以上にもわたるといえる。



障がい者自立のスタート台になり、今も現役で活躍するグループホーム「べてるの家」1号

まず「回復者クラブどんぐりの会」。当時精神科を退院した3人は、障がい者同士、助け合って病気を克服してゆこうと、そのころ若くして同町にソーシャルワーカーと

して赴任した向谷地<sup>むかいやち</sup> 生良<sup>いくよし</sup>さん（現サポートセンター理事、北海道医療大学教授）の協力を得て結成。4人は現キリスト教浦河教会に隣接した古い会堂を改装し、その名も旧約聖書の中の「神の家」からとった「べてるの家」と名付けた家に住み、その後退院してきた障がい者らを交え、レクリエーションなどを中心に活動した。

1 軒の家にソーシャルワーカーと3人の障がい者の生活…家族にうとまれ、地域からは冷たい目で見られる日常は、日々問題だらけ、想像を絶する困難に直面していた。しかしこの時学んだのが、困難な現実を担うのはほかならぬ障がい者自身であること、援助者はどんな時でも障がい者と近所付き合いできる人、ということだった。

そんな中で芽生えたのは「我々はいつも地域の人たちに迷惑をかけている。病気の回復を目指しつつ、何か地域にしてあげられることはないか」の思いだった。思い当たったのが日高昆布の袋詰めという内職。

カットした昆布を袋に詰めラベルを張るという仕事。単純な作業なだけに内職としての評価はあまり芳しくなく、いつも作業員不足に悩んでいた。ここに目をにつけた「どんぐりの会」、つまり「べてるの家」の人たちは、これこそ自分たちの自立につながり地域のお役にも立つ仕事と買って出た。障がい者の作業なので半日やってはぶらぶら、一日詰めては二日休みなどと最初はスムーズにゆかなかったが、そんな時は比較

的元気な人でカバーし合い、発注先の思いもあって地域の人たちが次々とやめていくなか何とか5年続き、それなりに信用もついた。ところがそんな折、注文元の水産会社が倒産し、詰める昆布が送られてこなくなるという事態が起きた。

## ■ 袋詰め 産直事業で自立出発

「原料が来ない。どうする」。この頃5年の経験を経た障がい者たちには「昆布詰めは自分たちの仕事」という自覚が定着していた。それならいっそこれまでのような下請けではなく、原料の仕入れから商品化、販売まで産地直送という形の事業を自分たちの手でやってみようということで衆議一決。漁協に出向いて昆布の確保を取り付ける一方、生産資材の調達、資金の確保、販路の開拓などすべて当事者たちだけでやってのけた。生産者側に、消費量の頭打ちで販路の拡大をしたいという期待があったことも幸いした。



「べてるの家」の総合拠点、浦河べてるの家本部。館内外で障がい者たちの語らいが絶えない

この自力による事業化は、地域との結びつきを密にするという思わぬ副産物を産んだ。原料の調達、詰める袋や密封する機械の購入、ラベルの作成、秤や切りバサミの手配など一連の準備を通じて、これまで障がい者の手仕事程度しか評価していなかった地域の人々の目が、「なかなかやるじゃない」に変わり、中には「がんばって」の励ましや、計算にはパソコンが便利、と機材一式を貸してくれる企業まで出てきた。

この地域の評価に自信を得たメンバーは、以後、この時お付き合いした人脈を財産に次々と事業を起こし、会社を立ち上げていった。捨てられていた生ゴミをもらい受けての養豚場、顧客の減少で宅配を中止した本屋さんの書籍配達の格安請け負い、病院や赤ちゃん、高齢者宅へのおむつの宅配、病院や住宅の営繕受注、各種介護商品の販売……。

「べてるの家」は、いまでは16部門で障がい者従業員百数十人を抱え、年商1億円の“大企業”に発展。1993年には「有限会社〈福祉ショップべてる〉」を立ち上げ、2002年には社会福祉法人「浦河べてるの家」も設立した。従業員は自宅から通う人もいるが、4、5人が一軒を借りて共同生活をするグループホームが多く、その数は最初の「べてるの家」を含めて二十数棟にも。病院の話では、一人ひとりが職につき、助け合って暮らしているので病気の再発で入院する障がい者は極めて少なく、入院患者

数の割合は他の地域の半分以下、薬の使用量も極端に少ないという。こうした実績は、精神障がい者の対応を模索する道内外の自治体や団体の関心を呼び、「べてる」の実情視察、見学に訪れる関係者は引きも切らず。ここ1、2年は年間およそ2千人、最近でも東京都の池袋でホームレス支援に関わるNPOのスタッフが訪れ、長年の浦河の実践経験を学んでいった。

その強みはなんといっても事業、企業を支えるのが精神障がい者自身であるという点。企業化の原点は「自分たちも病気になって色々苦しい目に遭っている。私たちが会社を創って障がいを持つ人やお年寄りのために車椅子や介護ベッドなどの商品を扱うことは、そんな人たちと触れあい、少しでもわかりあえることにもなると思うの」と、自らも障がい者で介護用品の店を切り盛りしている女性の言葉が象徴的。

## ■ 地域づくりに欠かせないパートナーに

こうした歴史を踏まえ、その主となる業を引き継ぐ形でスタートしたのが「セルフサポート浦河」だ。障がい当事者が自分自身と仲間を助ける活動全般を支援し、医療や福祉など種々の社会施設、施策を活用できるよう図らい、そのための研修、啓発を行うなどが主な狙い。最も力を注いでいるのは障がい者自身が発表者となり、障がい者やその家族を対象に週1回行っている「当事者研究」。あるテーマを決めて障がい者一人が自分の悩みや苦しみ、喜びなどの

体験を発表。これに、集まった障がい者らが感想や意見を述べ、障がい者同士の心のうちを明かし合い、共感し、明日に向かって前進しようという催し。7月のある日のテーマは「素直になれない自分」。発表者の女性が「みんなに笑われたくない、低く見られたくないと思う自分を飾るのね。そこに素直になれない自分があり、それを乗り越えようとするけれどとても難しい」と発表。すると40人ほども集まった障がい者から次々に手が上がった。

「傷つきたくない自分があることに気が付かされ、自分だけではないと安心しました」、「素直になれない内心の存在を素直に認め、さらけ出したのはすばらしい。私もこれからそうしたいと思う」などの発言が相次ぎ、病気を持つ者同士、コミュニケーションを取り合うことがいかに大切かを吸収し合った。このあと有志数人は、「障がい者仲間が入院している病院を訪問、患者と語り合い「みんな待っているから一日も早く退院して」と激励し、絆を深めた。

このほかセンターは、企業育成研修会や生活支援のための出前料理教室の開催、地元の人たちとの交流の場の設定などエネルギーな活動を展開しており、町や町内団体から「私たちに何かお手伝いできることはありませんか」と申し出があるなど、地域づくりに欠かせないパートナーになっている。



意思疎通に欠かせない当事者研究。会場には活発な意見や感想が飛び交う。

一連の展開についてセンターの伊藤知之常務理事は「先輩の人たちの血の出るような苦勞と障がい者自身の努力、それに地域の人たちのバックアップのお陰でここまで来られた。私を含めみんな障がいを持っているので、なかなかうまく進まない面もあるが、べてるの家やセンターのモットーは『一人一企業』なので、今後も自分たちの力で何とか伐り開いてゆきたい。みなさんの変わらないご支援を賜りたい」と、早坂潔理事長の思いも込めて語っている。

#### ■ 連絡先

〒057-0024 浦河郡浦河町築地 3-5-21

理事長 早坂 潔

常務理事 伊藤 知之

TEL/FAX 0146-22-9929

Email : e-mail@selpourakawa.info

URL: <http://selpourakawa.info/>

営業時間：午前 11 時～午後 6 時